

## 鉄道の開通と青木橋

本覺寺のある丘と幸ヶ谷公園のある丘とは元来ひと続きでした。この丘を切り開き、明治五年（一八七二）、新橋―横浜間に鉄道が通されたのです。この工事に伴い、鉄道をまたいで旧東海道を結んで架けられた橋が青木橋です。当時、神奈川の停車場は、この橋のすぐ南側につくられていました。

その後、明治三十七年（一九〇四）には、後に横浜市電となる横浜電気鉄道が神奈川―大江橋間に、翌三十八年（一九〇五）には京浜電気鉄道が川崎―神奈川間に、また、大正十五年（一九二六）には、東京横浜電気鉄道が丸子多摩川―神奈

川間にそれぞれ電車を走らせました。このように交通の中心地として栄えた青木橋付近も、昭和三年（一九二八）、現在の横浜駅ができるとともに、その中心性は失われていったのです。



「神奈川蒸気車鉄道之全圖」横浜開港資料館所蔵

## 普門寺

甚行寺の先に普門寺があります。

普門寺は、洲崎大神の別当寺であったため、「洲崎山」と号し、真言宗智山派に属します。

また、寺号の「普門」は洲崎大神の本地仏である観世音菩薩を安置したことにより、観世音菩薩が多くの人々に救いの門を開いているとの意味で名付けられたと伝えられています。



## 洲崎大神

宮前商店街をさらに進むと、洲崎大神に出ます。源頼朝が、安房国の安房神社の神をこの地に招いたのが、洲崎大神の始まりといわれています。

昔、この神社にあった御神木のアハキがなまり、青木町の町名になったといわれています。『江戸名所図会』に描かれた雰囲気は、今も石鳥居や周囲の地形などに残っています。神社前の道を海側へ、第一京浜に出るあたりが舟着き場でした。かつて六月のお祭りには、みこしを神社前の海にかつぎ入れ、安房神社の神と対面させる「お浜下り」という神事が行われました。



## 甚行寺

青木橋を渡り、旧東海道の道筋にある宮前商店街に入ると、山側に甚行寺があります。開港当時、甚行寺の本堂は土蔵造でしたが、改造を加えてフランス公使館に充てられたといわれています。

関東大震災と横浜大空襲によって建物は失われましたが、昭和四十六年（一九七一）に本堂・客殿を再建し、現在に至っています。

境内には横浜市の名木古木に指定されている、樹齢約三百年以上のイチョウの古木があります。

## 宮前商店街と旧街道

宮前商店街は、台町あたりとともに、旧東海道の風情を今に留めるところで、この「神奈川宿歴史の道」のルートでは唯一の商店街になっています。

かつて、神奈川宿の「亀の甲せんべい」は有名で、大奥や諸大名の御用達だったともいわれます。



近隣のポートサイド地区では「アート&デザインの街」をテーマに、都市型住宅・商業・業務・文化機能が調和した街づくりが進められており、これを機に由緒あるこの地域のあらたな発展が期待されます。

## 権現山

神奈川宿を描く絵図には、街道北側にひととき高い山が描かれていることが多く、その山を権現山といっています。

幕末に描かれた『神奈川権現山外国人遊覧』の図にも、外国人の背後にこの山が見えています。しかし、今はもう、それらしき山はありません。幕末から明治にかけてこの山が削り取られ、その土が台場や鉄道用地の埋め立てに使われたのです。

現在、幸ヶ谷公園や幸ヶ谷小学校のある丘は、権現山の跡であり、本覺寺のある丘ともひと続きでした。

この権現山は、古戦場として知られています。戦国時代、関東管領上杉一門の



「神奈川権現山外国人遊覧」横浜市歴史博物館所蔵

家臣でありながら、北条早雲に内通して主君に反旗を翻した上田蔵人の砦がこの山の上にあります。管領方二万の大軍が山上の上田方の砦を包囲し、十日にわたる戦いの後、ついに上田方の砦が落ちたといわれています。

## 神奈川の大井戸

宗興寺の境内のすぐ脇には、「神奈川の大井戸」と呼ばれる井戸があります。

徳川将軍や明治天皇の通行の際、その水が使われたといわれています。

この水の量が増えると翌日の天気がよくなるといわれ、街道を通る旅人には、「お天気井戸」とも呼ばれていました。



## 宗興寺とヘボン博士

幸ヶ谷公園から幸ヶ谷小学校脇の坂道を下ると、『神奈川中図会』では権現山の麓に描かれている、宗興寺に出ます。

開港当時、アメリカ人宣教師で医者であったヘボン博士が、ここに施療所を開いていました。これを記念する石碑が境内に立てられています。

このヘボン博士は、「ヘボン式ローマ字」でよく知られ、日本で最初の和英辞典を完成し、聖書の翻訳なども行いました。後に、明治学院を創設するなど、わが国の教育にも尽くした人でした。

